

発展第二段階に入る中国

—— 東北と中部連携が鍵 ——

環日本海経済交流センター長 藤野文悟

瀋陽の今日 — きれいになった街

中国東北地方の開発に協力する日中経済協力会議が本年度は5月下旬中国遼寧省瀋陽市で開催され、私は富山県新世紀産業機構の代表として参加した。

今日の瀋陽は大きく変貌を遂げつつある。東北地方最大の重化学工業基地である瀋陽は中国の内陸の雄、重慶と並び工業発展の最先端にいた分だけ私の印象では環境汚染の激しい工業基地であった。重慶と同様である。瀋陽と云えば美しい港町大連と比較し、何か埃っぽい無味乾燥の街という印象が強かった。それがどうだ。空気が澄み、街がきれいになった。美しい青空が広がっている。飛び散る柳絮（柳わた）も白い雪の様で風情がある。かつて中国で一緒に仕事をしていた仲間が瀋陽に駐在しているが、彼は瀋陽での生活に大いに満足しているという。環境問題にかける中国政府の強い意欲を感じる。環境を重視し、美しい港町大連を作り上げた薄熙来氏（元大連市長、遼寧省省長、現商務部部長）の功績かも知れぬ。

東北地方は日本にとって大変微妙で敏感な場所だ。特に瀋陽は旧奉天で1931年9月18日の柳条湖事変を思い起こさせる。柳条湖を訪れて見たが、まだ一世紀も経過している訳ではなく歴史は決し

て風化していない。にも拘らず、東北の中国人は親日的だ。日中両国民の東洋民族としてのDNAを感じる。孫文の云ったアジアの王道を共に語れる素地がある様だ。又、かつては一つの陸地であったろう。日本海を身近に感じて近親感は強い。反日デモも東北では殆ど発生していない。石井知事の訪中で富山県と遼寧省とは今後観光でも大いに交流することになった。富山県は各分野で大いに協力出来る相互補完性がある。鉄西区の経済開発区には農業開発区も出来ているし、重化学工業のみならずソフト、サービス、衣食住の分野でも協力出来よう。富山には「先用後利」という優れた商業感覚もある。大いに生かすべきだ。

瀋陽で一つ困ったことは神風タクシーである。友人に事故はないのかと聞いたら事故は少なくなると云う。小心の小生はとても瀋陽のタクシーには乗れない。それが唯一の不満であった。しかし、それも経済発展の一つのプロセスかも知れない。

東北地方の今後の問題は東北三省の横の連携をどの様に強め、東北の大きな国内市場をどう作り上げるかである。その為には、東北の経済の半分を占める遼寧省がどの様に指導力を発揮するかにかかっていると思う。

勃興させたい中部、点から線へ線から面へ

5月中旬に安徽省合肥市を訪問した。中国は西部大開発、東北振興に続いて中部開発を打出し、世界各国の代表団を中部の古都合肥市に招き、中部開発への外資の協力を要請したのである。西部大開発はすでに鉄道、道路、ガス、電力などのインフラ建設を中心に着々と進行して居り、一方、旧重化学工業基地の東北地方にも光が当てて来た。その一方でいわゆる中部の発展が欠落しているのではないかということである。中部は安徽、江西、湖北、湖南、河南、河北、山西の七省を指す。安徽省は上海や武漢にかくれて日本には馴染みが薄いところかも知れないが、歴史的には老子、朱子、朱元璋の出身地で黄山でも有名である。長江デルタに近接した有利な地勢にあって経済的には機械工業などがかなり発展している。

中国の改革開放経済発展は先ず都市から始まった。深圳、広東、上海、北京、蘇州そして地方の各都市が点として発展した。広大な中国を総合的に持続的に発展させる為には大きな面とならねばならない。それが中国の国内市場の開発ということである。中国経済の発展の第一段階は積極的な外資の導入にあった。外資の呼び込みは比較的発展している大都市に集中せざるを得ない。それが点である。それはかなりの程度に成功した。華南、華東、環渤海など幾つかの経済圏が成立しつつある。しかしそれだけでは結局発展しているものを取り残されるもの、貧富の格差は益々拡大するだろう。したがって発展した点を相互に結びつける線の形成が必要である。西部大開発は西部各省を結びつけることにより次の発展段階に移行する。貴州省はもはや孤立した省ではなく新疆、甘粛などと協同して発展する。東北も同様である。瀋陽

と大連、吉林、長春、ハルピンがどの様に結び合うか。その段階になった時に東部と西部を結びつける役割としてどうしても中部開発が必要となる。中部開発がなければ開発された東部のメリットが西部に浸透するのは困難なのである。

中国経済の発展はいよいよ第二段階の点より線へ向かっている。この線を形成するものは先ずインフラの建設であろう。相互の経済圏が融合し合う様になれば次は西への展開である。西への展開が本格化した時、中国には世界に類を見ない巨大な市場が形成されるだろう。すべての事業は一朝にして成るものではない。一步一步の積み重ねである。同時に戦略性を失わず忍耐強く進めねばならないが、中国は着実に歩を進めている様だ。日本にとって知名度の少ない安徽省に行ってその印象を強くした。

(以上)